

「君が好きです」
そう一言言えれば、何か変わっていたのだろうか？

——放課後。夕日が照らす教室。

「多福真示先輩、好きです！」
ゆるふわパーマでショートヘアの後輩と思われる可愛い女の子が顔を真っ赤にさせながら、告白してくれる。

「ありがとう。でも、ごめんね？ 俺、好きな人が居るんだ」
「そ、そうなんですか……。どんな人が聞いても大丈夫ですか？」
「どんな人……」

そう聞かれて若干戸惑う。あの子を一言で表すなら……

「……俺を幸せにしてくれる人？」
「……？」

あまりに抽象的に答えすぎたせいか、怪訝そうな表情で首を傾げられた。
誰だってそんな言い方をされたら意味が分からないと思う。だが、仕方ない。
彼女をあらわすには、それが一番適切な表現なのだから。

目の前の後輩の女の子は少し思案した後、「……つまり、敵わないということですね」と困った表情で言った。その言葉に俺は曖昧に笑うしかなかったが、後輩の女の子は何も触れずに笑顔で、「聞いて下さってありがとうございます。その方と幸せになれるといいですね」という優しい言葉をかけてくれた。凄くいい子なのだろうな、としみじみと思った。

後輩の女の子の優しさに甘え、「ありがとう」と言うと、「いいえ、では」と鞆を持って、教室を去って行った。

受験が無事終了し、卒業を控えるのみになった三月。

高校三年生であれば、大体の学校が自由登校になるだろう。しかし、我が高校は受験が終了したら、絶対に学校に来なければならないというルールが存在している。

そのため毎年この時期は告白シーズンになる、という噂が慎ましやかに囁かれていたが、三年生になるまで冗談だと思っていた。だが、ここ最近の手紙や呼び出し等を考えると、嘘ではなかったんだな、と思う。そんなことを考えていると、唐突に横から声が聞こえた。

「モテる男は大変だな、真示？」

「……湊か。君も人ごとじゃないと思うけどね」

そういう俺の言葉に、彼は「さあ？」と言いながら笑いながら、俺の立っている席の近くに座った。

天野湊。爽やかなルックスで、誰とでも簡単に打ち解けるコミュニケーション能力を持った彼はクラスの人気者。それ故にモテる。中学三年からずっと同じ学校、クラスで、家も近いことから交友関係が続いている。

「誰か待ってるの？」と問うと、「翔」と短く答えた。

「だから時間があるなら一緒に帰ろうぜ？」

「了解」と短く返事をしながら、椅子に座った。

翔とは湊の幼馴染、川上翔。細身で長身、誰もが男前と言いたくなるくらい綺麗な顔をしている。眼鏡をかけていて、寡黙で、ミステリアス。湊とは正反対だが、彼もモテる。湊を通じて翔と知り合い、仲良くなった。

ふと湊が「……ずっと思ってたんだけど」と若干言いにくそうに口を開いた。

「真示の想い人って誰？ 告白を断る為のハッターじゃねえよな」

「うん、ハッターじゃないよ。……この高校の人じゃないし」

そう、この高校の人じゃない。

俺の父親は転勤族で、小学、中学で一度ずつ転校を経験している。転校生は自己紹介をしなければならぬが、何よりも苦痛だった。

なぜなら幼稚園の頃から自分の名字が大嫌いだったから。

子どもが考える言葉遊び。俺の名前は多福真示。

多福。——おたふく。

「おい、おたふく！ 先生によばれてるぞー！」

「おまえら、近づくなよ！ おたふくがうつるからー」

「ぎゃははは」

その言葉遊びに周りが気付きだしてから、からかわれるのは当然の流れだった。気が強いわけでもない俺は、その現状にただ、耐えるしかなかった。

何度転校しても、同じ現象に陥っていたため、もはや抵抗する気もなかった。

この頃の将来の夢は婿養子にいくこと。勿論、からかわれない普通の名字に。

今からしてみれば莫迦みたいな話だが、世界の狭い小学生の脳みそで、今の現状から逃れられる唯一の考えだったのだ。

——彼女に会ったあの日までは。

小学校四年生の時、転校生がやってきた。

いつも迎えてもらう側だったため、受け入れる側に回るのは初めてだった。

「今日から新しく加わるクラスメイトを紹介します！ 水寫さーん」と先生が言うと、いたって普通の女の子が入ってきた。先生が黒板に「水寫 華音」と書いていた。この時、俺が読めた字は「水」と「音」だけ。それでも普通の名字だという認識は出来た。羨ましかった。

緊張した面持ちで「みずしま、かのです」と自己紹介を始めた。

「皆さんと仲良くなりたと思います。よろしく願います！」とにこりと笑う姿は、おそらく何人かの男子を射止めただろうと、子供ながらに考えていた。

——それから数日後の放課後。

「水寫。こいつに近づくなよ」とクラスのリーダー格の男子が水寫さんに話しかており、事情が読み込めていないだろう彼女は「何で？」と首を傾げて尋ねていた。

「おたふくだからな」と当然かのように別の男子が答え、それに対して「……何でおたふく？」と寛恕は返す。この返答を待っていたようで、にやりと笑い「多福って名字だからさ！」と偉そうに答え、数人の男子がけらけらと笑っていた。

自分の傷を抉られるようだった。つい最近であった出会った子に何て言われるかが怖くて、耳を塞ごうとした時――

「たふく？ だったらふくちゃんじゃない？」

「……………」

衝撃だった。会話の流れを丸無視したあだ名を提案する人が今まで居ただろうか？

若干茫然としている俺に、水寫さんは「どんな漢字なの？」と聞いてきた。

「り、量が多いの多に、福笑いの福……だ、けど」と精一杯の返答をすると、「多い福！ 福が多いなんて幸せだね！」と笑いかけてくれた。

水寫さんの返答が予想外だったことに気を害したのか、俺をからかっていた男子たちは、心底気分が悪そうに教室をそっと出ていった。

そのことをまるで気にしないかのようにさらに「ふくちゃんって呼んでも大丈夫？」と聞かれたので、条件反射のように「あ、うん」と言ってしまった。特に問題はない。

水寫さんの纏う空気はどこか、今までの人たちと違う気がしたから。

「やった！ 私のことは華音でいいよー！ これからよろしくね」と笑顔を向けてくれた時、数日前の何人かと同じように自分も、彼女に射抜かれた気がした。

「……………真示？」

「あ、ごめん。ちょっと思いふけてた」

そう答えると湊は、にやりと笑って「前の学校の子か、例の想い人は」と言った。

「明察」

「ふうん」といったきり、考え込み始めた。

何を言われるか若干ドキドキしながら、待っているとガラリ、と教室の戸が開く音がした。音の方向を見ると、俺らの待ち人である、翔がやってきた。

「真示も一緒だったか。悪い、待たせた。……湊は何をしている」

悩みこんでいる湊に怪訝そうな表情で翔が言う。「真示の想い人に関して」と短く答えた。その返答に対して、「へえ」と言い、にやりと笑いながら俺たちの座っている席の近くに腰を掛けた。

自然に人の恥かしいことを言いやがる。そしてつくづく二人は似ている。そんな状況解析をしていると、思考が終えたららしい湊が、顔を上げ、口を開いた。

「真示さあ、その子に告白した？」

「……！」

考え込んでいたのはそれか。湊はちよいちよい人の心を的確についてくる。

「その様子だとしていないようだな」と冷静な翔のツツコミに「……いや、一度だけ、あるよ」と答える。

湊と翔には本当のことを言っても大丈夫だと判断し、昔のことを思い出す。小学校六年のときに告白のようなことをしたことはあった。

卒業式が終わった後、教室で皆、それぞれ今までの思い出を語り合っていたが、俺と彼女はベランダで話をしていた。

「卒業だね」と物悲しげな表情で言った彼女は、式でも散々泣いていた。ほとんどが公立中学校に進み、メンバー編成に大きな変動はないはずだ。

「そんなにメンバーも変わらないから、四月にはまた笑って会えるよ」

「そっか、そうだよね」と言いながらも、目から涙が零れそうになっていた。感受性が強いのも彼女の魅力の一つだった。

「それにしても多福っていう名字良いね。羨ましいや」

卒業証書の名前を見ながら、彼女がそう言ってくれる。これほど嬉しいことはない。

「じゃあ、……あげるよ」

「え？」

自分でとんでもないことを言っている自覚はあったけれども。

ふと思ったことを言ってしまったことに若干、後悔したけれども、今更どうしようもない。

「この名字、……華音ちゃんにあげるよ」

「本当？ 楽しみにしてる！」

その意味をきちんと理解してはいなかっただろう。それでも笑ってくれたのが、唯一の俺の救いだった。その後、いつもより少し長い春休みを経て、少し緊張した面持ちで中学に行った。しかし彼女に出会ったときの初めの一言は「おはよう！ 同じクラスだよ。また宜しくね！」だった。

ほっとした、というのも正直な感想だが、心のどこかでショックを受けていた。

思い出した話をかいつまんで簡単に話すと「それは告白とは言わない」と二人揃って言われてしまった。

「……なんで？」

「婉曲すぎて分かんねえよ、そんなの」

「理解しろ、というほうが無茶だろう」

「はは……」

怒涛のツツコミに笑うことしか出来ない。

中学校で転校する前に「待ってて」と言えなくても、一言「好きだ」と言えれば、何かが変わったのだろうか？ そもそも両思いでもないのに、待ってては可笑しいか。

「それで、……後悔はしてないのか？」と真剣な表情で翔が言った。

「後悔……」

傷つくのが怖かった。だから、転校する前にも何も言えなかった。

無難に「また会えたらいいね」って言って笑い合った。

「してないよ。告白して困らせるのも微妙だし」

告白して、振られて、困らせて、曖昧になって、別れるくらいなら、
いっそ——何も言わないほうがいい。

若干の沈黙が流れた後、湊が話し始めた。

「……困らせていいんじゃない？ 恋愛は自己満足だろ？」

「……！」

自己満足。

決してあまり好ましい言い方ではないが、一理ある。

["Lasting regrets result from the things we fail to do, not those we do."]

「……え？」

“人間は、行動した後悔より、行動しなかった後悔の方が深く残る” 心理学教授ギロビ
ツチ博士の有名な言葉だ。今のお前に捧げるにふさわしい言葉だと思うが？

得意気な表情で翔がそう言い放った。「やっぱり翔は持っていくな」「嫌い」と目の前
で繰り広げられているコントじみた会話は耳に入らず、この二人は凄いと改めて思った。

「……俺、頑張ってみるよ」とそっと言うと、満足げに微笑み「帰ろうぜ」と言う湊の言
葉とともに、俺たちは岐路についた。

高校を卒業し、それぞれがそれぞれの将来の夢を叶える為のために、別々の道を歩む。
は将来の夢を目指して勉強するために、前の地元の大学に通う。

そして——君に会うために。

桜舞う四月。大学の帰り道。電車の中で見覚えのある少女を見掛けた。

「……華音ちゃん？」

「……え？」

今度こそ、後悔しないために、十年分の思いを君に伝えよう。

「多福という名字に覚えはありませんか？」

——水寫華音さん、君が好きです。

終わり